

2026年度 大学入学共通テスト 「歴史総合、世界史探究」の分析

世界史

学校法人 河合塾 世界史講師 井上 徳子

1 はじめに

「歴史総合、世界史探究」の共通テスト2年目となった2026年度の平均点は60.88点で、66.12点の昨年度より5.24点低かった。ただし、本年度の平均点は、直近の「世界史B」の平均点（2024年60.28点、2023年58.43点）に近い（昨年度の「世界史B」68.2点は受験者が高卒生のみなので除外）。むしろ、ほぼ現役生のみが受験した昨年度の「歴史総合、世界史探究」の問題が、取り組みやすい問題だったということだろう。

2 全体の概略

形式：昨年度を踏襲し、大問数5題、マーク数32で（下の表参照）、大問5題中、**第1問**が「歴史総合」（25点）、**第2問**以降が「世界史探究」（75点）であった。すべての大問で、班別学習など生徒の主体的な探究の場面を扱っており、学習指導要領に沿った出題であった。そして、史料文・ノート・図・グラフ・表など多様な資料や会話文から情報を読み取る必要がある問題がほとんどで（本年度はマンガ『ベルサイユのばら』の一コマが使用され注目された）、読み取った情報と、習得した知識を組み合わせながら総合的に判断する問題が大半であった。

分量：次の表は全体の分量である（*は歴史総合）

表 共通テスト2026年度、2025年度、試作問題「歴史総合、世界史探究」の分量の比較

	2026 本試	2025 本試	試作問題
問題構成	大問5題 （*1題）	大問5題 （*1題）	大問5題 （*1題）
マーク数	32（*8）	32（*8）	33（*9）
ページ数	36ページ （*8ページ）	34ページ （*9ページ）	40ページ （*10ページ）

ページ数を見る限りは昨年度より少し増加した程度に感じるが、会話文や資料等を1ページ内にまとめる都合上、行間を詰めているページがあり、実際は分量が非常に増加している。例えば、単純な行数比較ではあるが、丁寧に読み取る必要がある史料文・会話文は、昨年度よ

りともに2倍以上増加していた。従って、受験生にとっては時間的な余裕はなかっただろう。あるいは、最後まで集中力を持続できなかった受験生もいたのではないかと。
時代：昨年度は、「世界史探究」で前近代史からの出題が多かったが、近現代史から出題される「歴史総合」を加えると、前近代史と近現代史の比率はほぼ同じであった。2026年度は、「世界史探究」で前近代史からの出題が昨年度より減少したため、「歴史総合」を加えると、全体的には近現代史からの出題が多かった。

地域・分野：昨年度同様、「世界史探究」で欧米史とアジア・アフリカ史の比率がほぼ同じだったが、「歴史総合」でアジア史（日本史を除く）の比率が高かったため、全体としてはアジア・アフリカ史が多かった。また昨年度同様、「世界史探究」の欧米史では古代ローマ史と西欧史が、アジア・アフリカ史では中国史が多いが、それらの地域は文字史料が豊富なためであろう。分野では、政治史や社会経済史が多かった。

3 「歴史総合」（第1問、「地理総合、歴史総合、公共」の「歴史総合」第2問と共通問題）

近代化・大衆化・グローバル化のすべてから出題されており、全範囲をカバーしていた。ただし、昨年度同様、近代化が多く、全体の半分強を占めた一方で、大衆化からの出題は少なかった。

世界史・日本史の比率は、世界史のみの小問が半分を占めるなど、世界史からの出題が多かったが、昨年度はなかった日本史のみの小問が、2問出題された。

次の例題1は、河合塾が集めたデータで（以下同）「歴史総合」中、一番正答率が低かった問題である。あが日本史の内容なので、そこが正しく判断できなかったのかと思いきや、正解②以上に選択されていたのは③であった。つまり、あの日本史分野だけでなく、いの世界史分野も正しく判断できなかったことになる。この問題の正答率が低かった一因は、「ノート1中のフランス皇帝」の在位時期が分からなかったためであろう。

●例題1 2026 年度共通テスト本試：第1問 問2 2

A 本田さんとマルタンさんの班は、フランスの第二帝政下で行われたパリの都市改造について調べ、ノート1にまとめた。(一部抜粋)

ノート1 パリにおける社会階層による住み分け

- ・19世紀半ば以降、フランス皇帝の主導の下に、積極的な対外政策とともに、パリの大規模な都市改造が行われた。この改造の結果、図1の居住のあり方は次第に姿を消していった。図2は、1872年の時点で、19世紀前半とは異なる住み分けが存在することを示している。

問2 ノート1(関連部分のみ抜粋)中のフランス皇帝が在位している間に起こった、フランスの対外関係上の出来事について述べた文あ・いの正誤の組合せとして正しいものを、後の①～④のうちから一つ選べ。 2

あ フランスは、長州藩に対して、報復の砲撃を行った。

い フランスは、イギリス・ロシアと協定を結び、オスマン帝国領の分割を取り決めた。

- ① あー正 いー正 ② あー正 いー誤
③ あー誤 いー正 ④ あー誤 いー誤

問題文やノート1から当該皇帝がナポレオン3世で、即位時期が19世紀半ばと読み取ったうえで、退位時期は習得した知識を活用する必要がある。ナポレオン3世は普仏(プロイセン-フランス)戦争に敗北して退位するのだから、1870年代初めと判断するのだが、普仏戦争の時期がピンとこない場合は、普仏戦争中にドイツ帝国が成立することを想起するとよかった。それが1871年だから(この年号は知っておくべき)、そこからナポレオン3世の退位時期を推測するのである。

さらに、ドイツ帝国成立の年は、岩倉使節団が日本を出発した年であることを知っていると、あの事件は幕末に起こったのだから、ペリー来航の1850年代から、明治初期に岩倉使節団が出発した時期、すなわちナポレオン3世の退位時期の間に起こっていると考えることができ、正文と判断できる。もちろん、あが1860年代と正しく言えることがベストだが、世界史の受験生にとって日本史の情報の習得が負担であれば、上記のように、日本史の情報を世界史の情報にひも付けするとよい。そのためにも、世界史の学習の際に、同時期の日本を確認する癖を付けておくとよいだろう。

なお、『明解 歴史総合』p.38に、「世界の中の日本：ナポレオン3世と江戸幕府」というコラムがあり、幕末の日本とナポレオン3世の関わりが詳述されている。こうしたコラムは、歴史のイメージを正しく膨らませる一助になるとともに、受験そのものにダイレクトにつながる可能性がある。『明解 歴史総合図説 シンフォニア』p.78

やp.94でもナポレオン3世と幕末の日本との関係が述べられている。

4 「世界史探究」(第2問～第5問)

昨年度に比べて読むべき会話文・史料文の分量が著しく増加し、また、第2問・第4問・第5問の最後の設問は、その大問中のすべての班別学習や探究活動等を踏まえた出題で、問題文を最初からもう一度見直す必要があり、非常に煩雑だったと思われる。本年度で一番正答率が低かった次の例題2も、そのような設問であった。

●例題2 2026 年度共通テスト本試：第4問 問6 27

問6 世界史上の「帝国」のあり方について探究した生徒たちは、さらに考察を深め、その結果をメモ1～3にまとめた。それぞれのメモの正誤について述べた文として最も適切なものを、後の①～⑥のうちから一つ選べ。 27

メモ1

キューバがスペインからの独立を求めた背景には、ナショナリズムの影響があった。古代のローマ帝国の支配が終わった時代にも、自立に向けた諸民族の動きが見られた。国民国家建設を目指す独立運動が繰り返された点で、両者は類似していると考えられる。

メモ2

フェリペ2世は、プロテスタントを弾圧したため、オランダ独立戦争を招いた。イスラームを篤く信仰したアウラングゼーブは、ヒンドゥー寺院の破壊などを命じ、反発を招いた。不寛容な宗教政策が、帝国衰退の要因の一つとなった点で、両者は類似していると考えられる。

メモ3

アウグストゥス帝は、ローマ帝国の一部とされた諸王国に、王を復位させた。アクバルは、マンサプダール制を導入して地方分権を進めた。地方の政権が維持されたという点で、両者の帝国統治のあり方は類似していると考えられる。

- ① メモ1のみ正しい。 ② メモ2のみ正しい。
③ メモ3のみ正しい。 ④ メモ1とメモ2のみ正しい。
⑤ メモ1とメモ3のみ正しい。 ⑥ メモ2とメモ3のみ正しい。

この問題は、正解②より④と⑥の選択者が非常に多かった。つまり、メモ2が正文という判断はおおむねできたが、メモ1・メモ3が誤文と判断できなかったのである。この問題は第4問の最後の設問で、それまでのA～Cの史料文や会話文を踏まえる必要があり、受験生はこの設問のあるページから7ページ前にまで戻りながら正誤判定をしたはずだが、誤りはいずれも読み取り部分ではなく知識に関わる場所であった。メモ1の誤りは、国民国家の概念が登場するのは18世紀以降であり、古代ローマ帝国の支配が終わる時期にはありえないこと、メモ3の誤りは、マンサプダール制が地方分権ではなく中央集権的な制度であることである。知識といっても単純な用語の間違いではなく、いずれも概念や制度の特徴についての正しい理解が問われていた。『新詳世界史探究』

では、KeyWord というコラムで重要な概念を解説しており、国民国家は p.204 の KeyWord で説明がある。またマンサブダール制は、p.162 の本文で「第3代皇帝のアクバルは帝国の中央集権の機構を整えた」という説明の後に言及がある。教科書の文脈を踏まえた丁寧な学習が望まれる。

●例題3 2026年度共通テスト本試：第3問 問2 17

星野：⑥現実の革命の過程でも、女性が大きな役割を果たす場面があったね。

中山：革命後、ナポレオン法典によって、ア。

問2 会話文中（関連部分のみ抜粋）の下線部③に関して述べた文

あ・いと、空欄 ア に入る文X・Yについて、最も適切なものの組合せを、後の①～④のうちから一つ選べ。 17

下線部③に関して述べた文

あ 女性を中心とした多数の民衆がヴェルサイユに行進し、国王一家をパリへ連行した。

い オランブ＝ド＝グージュは、ラ＝ファイエットらとともに「人権宣言」の起草に関わった。

ア に入る文

X 家父長権は肯定されたよ

Y 家父長権は否定されたよ

① あ－X ② あ－Y

③ い－X ④ い－Y

例題3は2番目に正答率が低かった問題である。あが正しいという判断はおおむねできていたが、アに入る文がYと判断した受験生が非常に多かった。ナポレオンに支配された各地で自由主義思想が拡大したことや、ナポレオン法典がフランス革命で生まれた近代市民社会の原理をまとめたものという認識から、そう判断したと考えられる。ナポレオン法典が家父長権を重視し、女性を従属的な立場に置く内容だったことは、「歴史総合」で学ぶことがありうる。例えば、『明解 歴史総合』p.35の「史料：ナポレオン法典」に「夫は妻を保護し、妻は夫に服従する義務を負う」という条項が挙げられており、同ページのコラム「世界の中の日本：日本にも影響を与えたナポレオン法典」でも「家長である夫に妻や子が従うこと」とある。とはいえ、共通テストの「世界史探究」としては難問といえる。

5 正答率が低い問題から見る受験生の弱点

まず、用語の概念や事象の特徴などを問う問題の正答率が低い。「世界史探究」で一番正答率が低かった例題2では国民国家の概念やマンサブダール制の特徴で、例題3ではナポレオン法典の特徴で得点率が低かった。この2問のほかに正答率が低かったのが、第5問 問3 30で、リストの主張の読み取り問題はできていた

が、リストの主張と同様の考えや背景があると推測される事例として、コブデンらが主張する穀物輸入に関する政策と、南北戦争直前の合衆国北部諸州の主張とのどちらが該当するかの2択がまったくできていなかった。

以上の問題は、単に事象を知っているだけでは正解できず、その事象の特徴などを理解できていなければ解けない。

単語の暗記だけでは太刀打ちできない、という点では、「歴史総合、世界史探究」の正誤判定問題そのものに、用語を使わず、内容説明からそれがどの歴史事象について言っているのかを判断しなければならない問題が多い。コブデンらが主張する政策が穀物法と分からなければ解けないし、「歴史総合」で正答率が低かった例題1も、そもそもあが四国艦隊下関砲撃事件、いがサイクス－ピコ協定だと分からなければ解けない。

このように、「歴史総合」の例題1の正答率の低さから、受験生が時期に関する知識が乏しいことや、知識を駆使して思考する経験が乏しいことが分かる。共通テストの問題は、短文そのものに事実の誤りはないが、問題の設定条件に該当しないから誤文だと判断する問題が多く、その際に、例題1のように時期で外してくる場合が多い。

6 対策その1～知識の底上げ

選択肢が正しいかどうか思考して判断するためには、資料や会話文を正確に読み取る読解力、知識を正確に習得している知識力（言い換えれば、学習指導要領の「知識及び技能」）の両方が必須である。そもそも、知識がなければ資料や会話文のどこがヒントなのか分からない。従って、知識の底上げが必要である。

共通テストの「世界史探究」では、扱う用語量は「世界史B」に比べてかなり減少したが、用語を直接使わずに出来事の時期・背景・経緯・因果関係・影響など、内容を問う問題が増加している。教科書などを利用した理解を深める学習が必要であり、用語の暗記だけでは対処できない。今回正答率が低かった例題は、すべて知識力で点差がついていた。ヨコのつながり（空間軸）やタテのつながり（時間軸）を意識した学習を心がけ、教科書や図説の図版やコラムなどにも目を通しておくとうい。

7 対策その2～実戦力の向上

問題の分量の多さや、また形式に慣れるためにも、模試や市販の共通テスト対策用問題集などを活用して、問題演習量を積極的に確保するとよいだろう。